



Paul Yoshinao Otsuka
Bishop of Kyoto

2020年聖靈降臨 京都教区司教メッセージ

■聖靈は恐れを確信に変えてくださいます

聖靈降臨の主日にあたり、京都教区の皆さんに挨拶をおくります。新型コロナウイルス感染症の拡大によって、四旬節から復活節を通して教会ではミサの休止がつづき、また信徒同志が直接会っての活動も全くできませんでした。多くの人が家にいる生活を続けていますが、キリストの弟子たちも恐れと不安の中で、マリアとともに最後の晩餐の高間に閉じこもっていました。しかし、五十日祭の日、キリストの約束のとおり聖靈を受けて勇気づけられ、確信に満ちた福音宣教者に変身していきました。キリストは今日も、パンデミックに苦しむ世界中の人たちに、この同じ聖靈を送り続け、不安と混乱の中にある人々を慰め、いのちの主への信頼を深めるように勇気を与えてくださいます。

■今年の聖靈降臨は新しい生活の出発の時

聖靈は炎のような舌が分かれて現れ、1人1人の上にとどまりました。一人一人です。教会共同体は集団であっても、いつも団体で行動する組織ではありません。信仰共同体を造っているのは、そこに属している1人1人の信仰者です。ミサ（エウカリスティア）はキリスト教生活全体の原点（泉）であり頂点と言われます。ミサに参加できない日々は、この泉と頂点の中間にある、個々人の信仰生活を見直す機会です。わたしたちは通常の生活ができない体験によって、「日常からミサを生きる」（司教年頭書簡2004年と2005年のテーマ）ことの大切さを痛感しています。聖靈降臨の後、それぞれが回心し、「パンを裂くこと、祈りをすることに熱心で」（使徒言行録2・42）、「心も思いも一つにし」（同4・32）、信者の群れとなりました。当分の間、ミサ参加の仕方に制限がありますが、各自の内的生活の価値を再発見し、神のみことばによって養われて祈る貴重な時間が与えられています。わたしたちにとって今年の聖靈降臨は、信仰を深める新しい道を歩み始めるときです。

■聖靈は分裂ではなく一致をもたらします

日本も世界も、コロナウイルス感染防止を徐々に日常化し、新しい生活様式を作り上げていくことが求められています。自分や自国だけの安全や安心にこだわるエゴイズムを排し、すべての人と協力することが必要です。皆が手を取り合って、痛みを分かち合い、弱い立場の人へ寄り添い、助け合い、譲り合いながら、新しい生活様式を受け入れ、ともに生きていきたいと思います。休業や自粛の中で助け合う人たちが、わたしたちの周りにたくさんいます。聖靈は思いのままに吹いています。教皇フランシスコが訴えられるように、難民キャンプの人々など、以前から見捨てられた状態のまま緊急事態にある人々が、コロナでいっそう困難で危険な境遇に追いやられていることを忘れてはなりません。聖靈の息吹を受けて、他者への怖れや偏見を超えて、奉仕するために隣人となる《よきサマリア人》となって、Protect-all-life、「すべてのいのちを守る」使命を果たしましょう。

2020年5月31日 聖靈降臨の主日

カトリック京都司教

+ Paul Y. Otsuka

パウロ 大塚喜直